

特集 都市の生物多様性地域戦略の課題と展望

なにわの賑わい，生命のにぎわい

大阪産業大学大学院 花 田 真理子

Keynote: “Thriving Osaka, Thriving with Life”. Mariko Hanada* (*Graduate school of Human Environment, Osaka Sangyo University*)

昨年 11 月に大阪市自然史博物館で開催された「大阪市生物多様性戦略の策定に向けたシンポジウム」で、筆者はパネルディスカッションに先立ち「なにわの賑わい，生命のにぎわい」と題して基調講演を行った。以下はその概要である。

私たちの住んでいる地球には、寒いところもあれば暑いところもある。暑いところの中でも、砂漠や熱帯雨林や海洋など、いろいろな場所がある。このように多様な環境があるからこそ、地球上には人間だけではなく様々な生物が生息しているのである。森の中を考えてみても、消費者と言われる人間や動物などがいて、酸素を生産する生産者と言われる植物などもいて、土の中で分解する微生物のような分解者もいて、それぞれが食べる・食べられる、助ける・助けられるという関係によってつながっている。

ところで、地球の誕生から今までを 1 年間に縮小した「地球カレンダー」で考えてみると、人類の誕生はいつごろだろうか。地球が生まれた 46 億年前を元旦のスタート、今現在を 12 月 31 日の最後の瞬間とすると、人類が誕生したのは 12 月 31 日の午後だと言われている。人類の定義にもよるが、夕方もしくは日が暮れてから現れたという説もある。大晦日の午後に地球上に誕生した人類だが、知恵を働かせて、産業革命以降、エネルギーを大量に使い、大量生産をしてきた。その結果、自然から有限な資源をどんどん採取し、自然

が受け止めきれないほどの廃棄物や二酸化炭素を出すようになってしまい、地球環境に深刻な影響が起きてきたのである。この産業革命が起きたのは、なんと大晦日の午後 11 時 59 分 58 秒である。

つまり、地球の歴史 1 年間のうちのたった 2 秒間、人類が好き勝手をしたせいで重大な地球環境問題が引き起こされるようになり、その影響で今や生物多様性も危機に瀕している。ここにいらっしゃる皆さんはよくご存知だと思うが、生物多様性が非常に豊かで且つもとの生態系の 7 割以上がすでに改変された地域が、これから守っていかないといけない「生物多様性ホットスポット」として、世界で 36 カ所選定されている。その中の一つが日本。つまり地球温暖化の影響が深刻化していく中で、日本という地域で地球環境とのつながりを考えながら生活していくことは、人と自然生態系が共生していく持続可能な地域社会の実現と同時に、地球環境にも重要な意味があるということになる。

ではここで、大阪というところについて少し考えてみたい。府庁・県庁の所在地で都が置かれた歴史を持つというと、まず平安京や平城京などが思い浮かぶが、実は、大阪にはさらに古く、飛鳥時代に都が置かれた歴史がある。その後も陪京として維持されるなど、古くから大阪は日本の政治の中心であった。

また大阪の地形であるが、古代には海が大阪平

野の奥深くまで入り込み、東は生駒山麓まで河内湾が広がり、上町台地が半島のように突き出ていた。その後、上町台地北側の砂州が伸びて淡水化が進み、弥生時代になると大きな湖となった。この肥沃な土地が、やがて河内木綿の産地となる。ちなみに江戸時代まで、大阪の「さか」は「坂」であったが、後に縁起が悪いということで「阪」になった。本稿では統一して「大阪」と表記している。

さて古くから大阪の難波津は、国家的な港であり、外交の基地、全国あるいは外国からきた貢物を中継する集散地になっていた。水上交通の要であり、初期の遣唐使はここから出発するなど大阪は昔から世界に開かれた窓であった。今でも大阪は水の都と言われているが、道頓堀橋や江戸堀橋などの名が示すように、豪商や各藩が堀川を開拓して町を建設し、水運の拠点となっていたのである。雑魚場や天満の青物市場、堂島の米の市場のほか、難波にもさつまいもなど新しいものを扱う市場や薬物を扱う市場があり、川魚を扱う市場も多かったと言われている。

ところで「なにわ」の名前だが、古事記、日本書紀に「なにわ」という単語が見られ、その後、奈爾波、那爾波などいろいろな漢字が使われてきた。なにわの「な」は野菜の「な」、つまりおかずという意味であり、河内平野で採れた農産物を表していたという説や、大阪湾は魚がよくとれたので、「魚の庭」でなにわと呼ばれていたなどの説もある。大阪市章は滯標だが、非常に流れが速く水位が変わるということで、「難波」「浪速」「浪花」などとも表記された。

さらに江戸時代になると、ここ大阪を拠点として国内に物資が行き交うようになった。廻船航路は東廻りと西廻りがあり、特に西廻りは大阪を出て関門海峡を通ってさらに北海道に行き、北海道から物資を持ち帰る北前船ルートに延長されるな

ど、大阪を中心として舟運が発達していった。

北前船ではオーナー自ら船に乗り、各地で買付をした結果、大阪に全国から物が集まるようになっていった。例えば大阪から木綿、酒、古着が送り出され、北海道からニシンやイワシなどが入ってくる。魚は身を食べるだけでなく、内臓は大阪周辺の綿花の肥料として活用されていたようである。大阪が様々な種類の魚の集積地だった名残の食文化をご紹介します。出汁に使う昆布は、京都は「利尻昆布」を主に使っていたが、大阪では「真昆布」が最高級品と言われていた。すなわち、京都では昆布と鰹節で主に出汁をとっていたのだが、大阪にはいろいろな魚を扱う市場があったので、料理によって鰹節やじゃこなど様々な魚を使うことができるという違いがあった。その際に味と香りがしっかりしていた真昆布のほうが好まれ、合わせ出汁の文化が作られたというわけである。また、真昆布は分厚いので佃煮や塩昆布の加工にも向いており、今でも大阪を代表する食文化となっている。

もう一つ大阪の食文化と言えば、全国の生産量の8割を占めていた「大阪家鴨」がある。明治時代にはウナギと双璧のスタミナ食品だったアヒルはヒルと呼ばれ、「ヒルを食べないと夏は越せない」と言われるほどであった。

今も残る大阪の農産物としては、なにわの伝統野菜があるが、最近その仲間に加えられたのが難波ネギである。有名な九条ネギの元は難波ネギであり、九条ネギよりさらに柔らかくてジューシーなので鍋にも合う。鴨なんばのなんばは難波ネギからきているとのことである。

また、サワラ（鯖）の旬は春であるが、大阪産のサワラは秋も旬であると言われる。秋に越冬のために大阪湾を通るサワラは、エサをしっかりと食べているので一層美味しい。

さてこうした大阪の農産物にも、温暖化の影響

が出てきている。例えば泉州の水ナスも柏原のブドウも、色づきが悪くなってきていて困っているとお聞きしている。(色が悪く、艶々していないナスのことを、「ボケナス」と呼ぶそうである。)

大阪府環境農林水産総合研究所の方のお話によれば対策は二つ、高温に強い品種の改良と、育成状況を調節することである。もちろんこうした技術開発も大切なことだが、どちらも対処療法であるため、大元の原因を考える必要がある。特に大切なのは自分と自分のまわりの環境との関わりを考えることであろう。環境が自分に影響し、自分が環境に影響することを考えずに、人間がどんどん経済活動を拡大し、まわりの自然システムから資源を取り込み、廃棄物や二酸化炭素を出していくと自然の容量を超えて影響を与えることから、持続可能性の危機が懸念されている(図1)。

人間の経済活動は生態系へも深刻な影響を及ぼし、外来種が増え、在来種が減るなど生物多様性が脅かされている。人間は開発によって動植物の棲み処を奪い、化学物質や病原菌、外来種や有害廃棄物を持ち込んで自然環境を悪化させる。過伐採や過耕作、乱獲など自然を資源として収奪する一方、適度に人間が関わって自然環境を保全する里地里山のようなエリアは少なくなっている。た

め池や田畑、里地里山が減っていることも在来種減少の要因の一つだそうである。先ほど申し上げたように、この問題は対処療法では限界があり、経済や私たちの暮らしのありかたそのものを見直す必要がある。そこに大阪市生物多様性戦略の視座がある。

近年、世界的にもいろいろな動きが出てきている。2010年に名古屋で開かれた生物多様性条約COP10では、「生物多様性を保全するための戦略計画2011-2020」の中核として、各国がめざすべき20項目の愛知目標が採択された。また2012年の国連持続可能な開発会議(リオ+20)では、UNEP金融イニシアティブが企業に、財務報告同様、自然の価値など持続可能性にかかわる情報の開示義務付けを提案し、世界銀行が「50・50プロジェクト」を提唱するなど、金融面から自然資本価値を国家や企業会計に反映させる動きが出てきた。そして2015年には、2030年までに達成すべき17の持続可能な開発目標;SDGs(Sustainable Development Goals)が国連で採択された。このSDGsの考え方は大阪市の生物多様性戦略にも反映される予定である。

私たちの暮らしは生き物に支えられている。大阪府立大学の石井実教授によれば、大阪名物のたこ焼き1個にも、実にたくさんの種類の生物が利用されている。食べ物だけではなく、衣・住・医、さらに防災・文化・芸術・観光など、私たちの社会はいろいろな生物のおかげで成り立っているのだが、経済の発達による国際化や効率化が進むにつれて、自分たちの暮らしが自然に与える影響が見えにくくなってきた。ここであらためて、私たちの暮らしと生物多様性とのつながりをもう一度考え直す必要があるのではないだろうか。

昔から「四里四方に病なし」、つまり自分が住んでいる16キロ四方の範囲で採れた旬の食材を食べていたら病気にならないとか、「初物七十五

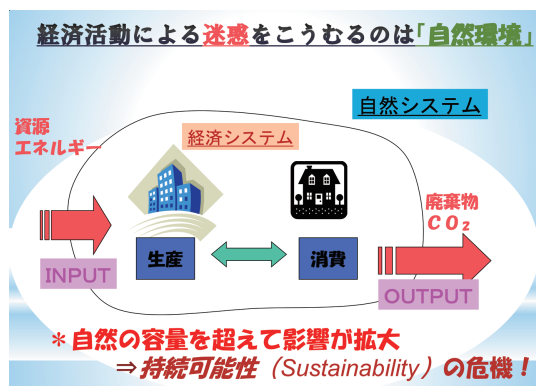


図1. 経済活動と自然環境。

日」，季節のはしりの食べ物を食べると寿命が75日延びると言われてきた。これは，自然や自然とのつながりに対する感受性が豊かだったということではないだろうか。しかし技術進歩で機械化が進むにつれて，人間が本来もっている能力が失われ，大量のエネルギー消費が前提になり，そして自然への畏敬の念を喪失することになってしまった。今こそ生き物いっぱいの大阪の価値をもう一度見直してみるべきときではないだろうか。

大阪市内に今も残っている自然はたくさんあり，その果たす役割は大きい。まず歴史的な経緯から社寺林が多い。また大阪には企業がたくさんあり，事業活動に関連して緑を創り出してくださっている。例えば梅田シティにある積水ハウスの新・里山は，都会の真ん中に様々な命のつながりと人々のつながりを創出。さらに同社は「5本の樹」という取組みで，家を建てる際に庭に地域風土に適した日本の原種や自生種，在来種の樹木を，3本は鳥のために，2本は蝶のために植えることを勧め，地域の生態系保全に貢献している。大阪ガスさんのNEXT21という実験住宅では，屋上緑化スペースに予想外の植物の種を鳥が運んできて樹種が増えているとのこと。鳥の生態系ネットワークに入っている証であろう。またなんばパークスでは，緑化した樹木の説明板などで，一般の来場者が自然を意識できるような仕掛けが啓発の一助となっている。

都会に自然が存在することで，いろいろな主体や生き物をつなぐネットワークが創られていく。大都会大阪で自然環境を保全し，生物多様性に配

慮することを通じて，生命のにぎわいがあふれるまち大阪が実現すればと考えている。

さて，最後に強く申し上げたいのは，大阪の強みが市民や事業者のパワーだということである。大阪では多くの団体の方が活動を続けておられる。市域の生き物調査をずっと続けてデータを蓄積し，メッシュマップにまとめているグループもある。セミの抜け殻調査も靱公園などで続けられている。また，外来種の駆除活動を淀川のワンドで行っていたら，イタセンパラが戻ってきたという嬉しい成果も上がっている。

環境教育という点では，「おおさか環境科」という環境副読本が，大阪の視点にこだわって作成され，市内全小中学校の児童生徒さんに活用されている。

今回の生物多様性戦略の策定を機に，みなさんと一緒にわたしたちの暮らしと大阪の自然，あるいは地球環境とのつながりを考えながら，暮らしのあり方を見直してみたいと思い，今回のシンポジウムを開催して頂いた。

大阪は商業都市。人の暮らしもあり，多くの企業の生業もあり，生き物の暮らしもある。経済活動や日々の暮らしで世界とつながり，消費者，生産者，行政という主体がつながり，新しい市場が創られ，市民の取組みがつながり，その結果，暮らしが生態系の一部としてつながっていくのではないだろうか。

様々なつながりを通じて，人の賑わいと生命のにぎわいが溢れるまち大阪を，ご一緒に実現していきましょう。